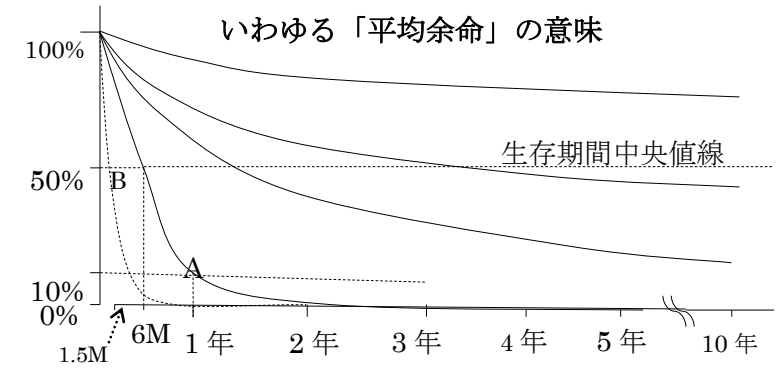
平成３１（令和元年）年８月５日朝礼
施設長　桑原英眞

プロとしての介護業務について――その７
生命予後の長短について

プロとしての介護業務について、その１ではプロとしての介護とアマとしての介護の違いを、その２では社会から期待される使命としての介護業務を、その３ではスマイル命ということについて、その４では仕事へのやりがいを持つことの大切さ、その５では第３者にも誤解されない言葉や行動への配慮も必要です、とのお話を致しました。そしてその６は介護報酬についてでした。今回は、生命予後の長短についてお話致します。

近頃参議院選挙で「安楽死を考える会」という政党名での立候補者がありました。当選者ゼロでしたが、そのスローガンは、自分の最後は自分で決めたい・制度を使いたくない人は無視すればよい・耐え難い痛みや辛い思いをしてまで延命したくない・人生の選択肢の一つとしてあると「お守り」の様に安心・家族などに世話や迷惑を掛けたくない・将来の不安に備えた貯金をする必要がない・予算を掛けずに国民が安心感を感じれる、等となっています。　どれをとっても皆さんは一つ一つ納得する点もあるのではないかと思います。

しかし、実はそのスローガンは落とし穴があります。その主張の前提には誤解があるというお話を致します。医師が余命何か月と言う根拠は下図のような理屈を根拠としています。従って**統計的な数字ですので、個々に当てはまるものではありません**。個々人にとっては、当たるも八卦・当たらぬも八卦、です。即ち、あと何年生きられると医師に言われたとして、あくまで参考として聞いておくのは良いことですが自分が 100%それ以上生きられないと思うのは早計ということです。医療に 100%ということはありません。ご本人にとっては余計なお世話です。日本は言論の自由がありますので言うのは自由です。信号無視も私たちがしてもニュースにはなりませんが、警官が行えばニュースになります。担当する職業によっては当然**ずれてはいけない制約**もついてきます。**同じように私たち高齢者の介護のプロがあと１週間の命だから意味がないと考えてはなりません。余命１週間でも１か月でも余命１年でも考え方は一つです。余命の長短で生命の尊厳は左右されません。あと何年しか生きらないという前提には誤解があるのです。**そして、**たとえ翌日亡くなっても生活リハビリは行う価値があります。**その基本の考え方を忘れないように致しましょう。



生存曲線　（例）A 線は非小細胞肺癌進行期ⅢB～Ⅳ期の支持療法のみ、B 線は小細胞肺癌ⅢB～Ⅳ期の支持療法のみの場合・・・（H.18 年時点）

老人保健施設一羊館の理念
利用者の方々すべてに尊厳・安心・満足を！

一羊館の行動指針
私たちは、保健・医療・福祉の架け橋のプロに徹します。
私たちは、利用者の QOL・職員の QOL・健全経営の３立を目指します。
私たちは、質向上のために日々の小さな工夫を忘れません。

話合いの３原則：
①相手の意見は決して否定しないでしっかり聞きます。
②自分の意見はしっかり言う。ポジティブ表現で言います。
③正解は一つではないことを自覚して自制します。